

十二月のテーマ

末を乱さず

捨てる前に 礼を尽くす

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。



え・たむらかずみ

現

代人は、大変なことを忘れてきた。「後始末」である。特に、

個人として、家庭、工場、会社その他などから出したゴミの類である。

そのために人間生活の破綻が迫っている。中には、そういう事実もまだ知らずに、あるいは知っていても、われ関せずの利己的な態度で、どしどし自分のゴミを放出している人たちがいるのである。

どうしたらゴミ処理の名案を、生み出すことができるであろうか。政治的解決の手段は当然必要だが、一方私たちが、今日から早速自分の出したゴミに対して、後始末をよくしないと、できるだけゴミを出さないで済むように、実践することだ。だがゴミというものは、どうしても出さなければ、生活できないのも事実である。だからゴミ処理という後始末をよくするためには、根本の心がけが、もう一つ奥にあるべきだ。それは出したゴミに対して、感謝の念を持つことだ。つまり、「わがゴミよ、ありがとう！」と、始末することだ。なぜそうするのが、根本的になるのか。その訳はこうである。

第一にゴミといっても、それは有益なものとして、いずれまた自分にかえってくるものだからである。

一般的に言って、ゴミの類は、また私たちのために形を変え、中味を変えて役立ってくれるようになるものなのである。だから、そうしたものを捨てる時、わが子を旅立たせるような気持ちで、ゴミを送り出すのが本当なのだ。

第二にゴミといっても、もともとは必要なものだったからである。包み紙にしても、物によってはそれがないと困るようなものもあるのだ。たとえば小包を送るのに裸のままではどうしようもあるまい。包み紙あつての小包なのだ。どうして軽視することができようか。

今まで使っていた電器製品など、役に立たなくなると、ポンと投げ棄てて、顧みもしないようだが、とんでもないことだ。人間だって、さんざん使われ、役に立たなくなったからといって、ポイと棄てられてしまったのでは、怨みと立腹しか残るまい。物でも同じことだ。

「今までごころうだったね。お前の

用も終わったようだから、やむなく処分させてもらうけれど、また形を変えてやってきて、役立っておくれ。どうもありがとう。ではまたね……」

といった心で処分するのが当然だ。このように美しい、本当の人間らしい愛情で後始末をするとき、またはそうするよう人の所で、物は生き生きとその個性を十分に発揮できるようにするのである。

総じて人類は、科学技術の進歩とともに、そして生活が便利になっていくにつれて、大自然の尊さ、物のありがたさなどを忘れてしまい、利己主義的なわがまま勝手な生活にうつをぬかし、そのためにいろいろな公害を招いて、われとわが身を滅ぼしつつあるのである。

いろいろな仕組みは複雑になってきているが、もとは簡単なのである。繰り返して言う。「ありがとうと、後始末をよくする」という簡単なことを実行することだ。これによって日常生活がぐっと引き締まり、生きる喜びが増えてくるという事実を体験することだ。

（新世書房刊『繁栄の法則』より）